

SEKAI

岩波書店

2008  
April  
no.777

# 世界 4

特集 **格差社会と増税論議** — 「消費税しかない」は本当か？

神野直彦……片山善博……三木義一……田村哲樹……井手英策……前田由美子 ほか



# 物語が生まれるとき

ドリス・レッシング (作家)、訳 福島富士男

228

# またふたたびの生きがい

——若年認知症の佐藤雅彦さんと『生きがいについて』を読む

永田浩三 (NHK)

235

# 「竹槍の村」に墜ちたB29 (上)

グレゴリー・ハドリー (新潟国際情報大学)、訳 石井信平

269

# 反戦投書——戦時下、庶民のレジスタンス

井形正寿 (元特高警察官)

262

# レバノン・ガザからの報告——深まるパレスチナの困窮

田中好子 (パレスチナ子どものキャンペーン)

286

# 虜囚の記憶を贈る第8回——今も続く精神的外傷

野田正彰 (関西学院大学)

303

# 小説家の四季——二〇〇八年冬

佐藤正午 (小説家)

224

# アジア女性交流史・昭和期篇 (12) 民族と民族の(狭間)を生きて下のこと

山崎朋子 (作家)

315

# 水彩紅樓夢 (22)

小林恭二 (作家)

324

# 脳力のレツスン (72)——問いかけとしての戦後日本——再び団塊の世代として

寺島実郎

41

# 閣下とジャック (16)

Jun Machida

213

# ル・モンド・ディフロマテックより バルカン半島——新たな「火薬庫」

ジャン・アルノー・デランス (訳 橋本一徑)

296

# 世界論壇月評

朱建榮・竹田いさみ・吉田文彦・石郷岡建

256

# ドキュメント 激動の南北朝鮮 (129)

編集部

278

# グラビア 海に近い町へ——公募作品 64

染谷 學

336

グラビアについて (公募規定)

アムネステイ通信

読者談話室

編集後記

17

295

# 「竹槍の村」に 墜ちたB29

(上)

グレゴリー・ハドリー

訳者 石井信平



Gregory Hadley

新潟国際情報大学教授。

いしい・しんぺい

翻訳家・著述家。訳書にイアン・ブルマ『戦争の記憶』など。

世界 SEKAI 2008.4

ことは急を要した。数秒ですべてが手遅れになる。若い飛行士がB29のキャピンの脱出口から身を躍らせ、バラシュートのヒモを引いた。爆撃機が遠い地上に激突するのが見えた。空中に浮いているつかの間の平和は、すぐに終わった。

彼は水田地帯に落下した。しかし、深夜だった。敵兵を捜す村人らは、彼がほんの数フィート近くにいることに気づかなかった。彼は聞いた。——苦痛による悲鳴、怒鳴りつける声。捕まった仲間の飛行士の叫び声だ。

何が起こっているのかは明白だった。日本人は捕虜を人間とみなさない。彼は45口径のピストルを救命ジャケットから取り出し、汗ばんだこめかみに銃口をあてた。

(元搭乗員ポール・トランプの証言より)

## はじめに

二〇〇七年に刊行した『竹槍の村』という本(本邦未訳)を書いたために、私は、一九四五年七月一九日から二〇日にかけて行なわれたB29の新潟空襲と墜落について調査した。日本側の目撃者とB29の元搭乗員、双方へのインタビューを中心に調査を進めた。さらに、公開された軍事資料や戦時郵便、日記、それに日本側が撮影した捕虜たちの写真などで補完した。

第二次大戦の戦記に必ずといっていいほど登場する英雄的な將軍や有名な会戦ではなく、私は、ふつうの人々の身のうちに戦時中起こったことに関心があった。そして彼らは戦後、その記憶のトラウマに、どのように耐えてきたのか？

歴史とは、いつ、どこで、をよすがとして人々を描く方法だ。『竹槍の村』は英国への旅がきっかけで生まれた。そこで会った友人が、私に第二次大戦下の新潟に関する調査を依頼したのだ。調べて行くうちに、戦争末期、新潟でB29が撃ち落とされた出来事に出会った。現地の人々は、火災と降下するパラシュートを目撃したこと、恐怖に加えて撃墜を喜んだことをこもこも語った。

友人からの調査依頼を片づけた後、私の興味はこの「B29 ミステリー」に集中した。搭乗員はどんな人たちだったのだろうか？ 彼らに何が起こったのか？ 半世紀以上の時が過ぎた今、外国人の私が調べて何か発見できるだろうか？

その答えを得るために私は三年間を費やした。新潟市郊外の小さな農村をあちこち歩き、各地の埃っぽい資料館や、アメリカの片田舎の町を訪ねた。教師たちや日本近代史の専門家、B29搭乗員の生き残り、新潟市や周辺の村に住む目撃者たち、連合軍捕虜や帰還兵の老人たちと、私は出会った。

私の訪問に、人々はまず疑い、応答することをためらった。思えば、私は傲慢なことに、彼らの古傷を癒し、両国の「架け橋」になろうなどと考えていた。しかし、私が取材を申し

込んだ老アメリカ人たちは、長く日本に住んだ私を「まともなアメリカ人」とはみなしてくれなかった。私が語りかけた新潟の村人たちはどうか。私がどんなに長くこの地に住み、あの出来事が遥か過去に過ぎ去っていようと、私の顔があのに捕まえた若造を思い出させる顔である事実を変えてはくれない。

私への猜疑心と、いつまでも長引く心の傷跡の両方を並存させながら、新潟の村人とB29のクルーは、「誰かに聞いて欲しい、記憶されたい、そして理解されたい」という共通の願いでつながっていた。その記憶は多くの人々の奥深くに半世紀以上も隠されてきた。長い人生も夕暮れを迎え、多くの人が重荷をおろしたいと願っていた。いま、誰か、共鳴の心をもって聞いてくれる人はいないか――。

佐藤俊司さんは、七月二〇日に起こった出来事を目撃者である。あの夜、いったい何が起こったのか、『京ヶ瀬村村史』に書き記している。「記憶はカイコの繭のようにもつれている」と。しかし誰かが糸口さえ見つけられれば、もつれた糸はときほどかれ、詳細な事実が書かれ得る。私は、この上ない時と場所に恵まれたことになる。

一九四五年七月二〇日に至るまでの彼らの人生と、その後起こったことの一つ一つは、他者と分かちあうべき貴重な出来事であると同時に、隠されても仕方のない醜悪なものだったことを私は知った。ここで『竹槍の村』の一部を引用し

ながら、物語の骨子を紹介していく。私は、敵・味方に分かれた両者の理性と人格を粉砕した出来事と、それが残したトラウマがどのようなものだったかを書こうと思う。

### B 29の搭乗員たち

新潟で不運に見舞われたB29クルーは、戦争末期に日本爆撃へと送り込まれた典型的なアメリカ人だった。そのほとんどが労働者階級の白人男子で、保守的なアメリカ中西部に点在する農村や町の出身者で占められていた。将校だけは都市部の出身で、比較的高い教育を受けていた。

ある者は愛国心や使命感から軍隊に応募したが、空軍を志望した理由は、ほとんど全員が同じだった。歩兵としてヨーロッパや南太平洋で起こった血みどろの地上戦を戦うよりも世界一のハイテク爆撃機に乗って空の高みで戦闘するほうが魅力的だったのだ。

入隊後、B29のクルーに与えられた軍事訓練と教育は、ただ一つ「任務中は自分の仕事に専念せよ」ということに尽きた。一人は燃料消費だけを見続け、一人は飛行ルートだけ、機銃係は敵機を撃ち、爆撃手はひたすら目標を狙った。誰も、普通の市民を殺しているという事実など、考えもしなかった。一九四五年三月一〇日、焼夷弾による東京大空襲で、一〇万人以上の市民が一晩で焼け死んだ。ここで、ゴードン・ジョーダン機長としたクルーを紹介しよう(写真1)。

ジョーダン・クルーは東京大空襲に参加していた。彼らに刷り込まれていたのは、真珠湾への不意討ちと「バターン死の行進」への復讐心だった。教育も人生経験も足りない、地方出のクルーにとって、三月一〇日の東京大空襲は、「東京全部が丸焼けだ！ こんなゴキゲンな焚き火は初めてだ」という言い回しになる。しかし、ニューヨークで日本人外交官の娘と一緒に学校に通っていたミルトン・ガリン(負傷して最



写真1 ジョーダン・クルー(1945年7月初め)  
後列(左から)マクグロー、スペロ、氏名不詳の訓練生、グラント、ウィーニック、アダムス、パークル、グラバント  
前列(左から)ホーキンス、ライド、トランプ、ジョーダン機長  
(写真提供 ロバート・グラント)

終フライトに不参加だった元ナビゲーター」は、眼下の火を見下ろしつつ祈った。「わが友よ、東京のどこかで生きのびてくれ」と。

ジョーダン・クルーが飛行任務を始めたのと時を同じくして、南太平洋を基地に、新しい将軍がB29作戦を指揮しはじめた。葉巻がトレッドマークの、頑固で粗野なカーチス・ルメイ将軍は、欧州での対ナチ作戦でも、民間人への被害を冷酷に無視した人物としてよく知られていた。

東京空襲に際して、ルメイは、B29作戦を高空爆撃から夜間の低空爆撃に切り替えた。これはジョーダン・クルーが空軍に参加する前に期待していた作戦とは違っていた。将校たちは不満を述べた。低空では、低速で動きの鈍いB29は危険極まりないと。ルメイは答えた。

「それなら、私は多くの飛行機をつぎこみはしない。爆撃目標には必ず命中させなければならない。そのため飛行機と人員の補充はいくらでも可能だ」

メッセージは明快だ。地上の日本人と同じく、指揮官らにとってジョーダン・クルーもまた同じく「消耗品」だったのだ。

B29は日本軍の対空部隊にとって楽な射撃目標になった。多数のクルーが日本上空や太平洋上で墜落した。それは、日本軍の対空砲火が正確になったこともあるが、B29自身が危険を抱えていたことの方が深刻だった。アメリカ軍は多数の欠陥を放置したままB29を飛ばし続けた。

数回の遠征で、ジョーダン・クルーはエンジン・トラブル、突然のガス欠、電気系統の欠陥で何度も死にかけた。機体のトラブルと敵からの対空砲火で、ジョーダン・クルーは「二度と帰還できないかもしれない」という恐怖に苛まれた。そして、「もし日本上空で放り出されたら……」という想像ほど彼らの心を凍らせるものはなかった。主任ナビゲーターだったミルトン・ガリンは私に語った。

「当時、日本に降下したクルーがどうなるのかなど、誰一人わかつちやいなかった。フィリピンにある日本軍捕虜收容所から噂は伝わってきた。『バターン死の行進』のこと、捕虜がどう扱われたか……、思っただけで恐怖が募った。日本上空で身を投げるのは、深海の闇に落ちてゆくと同じだ。下で何が待ち受けているか、我々の誰も知らなかった」

最後の遠征となった新潟への飛行の前に、ガリンは対空砲火で負傷し、帰国していた。もう一人のクルーも、遠征のストレスで精神に異常をきたし、国に送り返された。睡眠薬を使い始めたクルーもいた。飛行の前、ジョーダンは浴びるように酒を飲むようになった。

彼は戦争に身を献げる自分の役割に幻滅しはじめていた。その不満を、妻への手紙に書き綴っている。——自分たちクルーは、欠陥機に乗せられ、チップケな町にどンドン爆弾を落としている。上官たちは昇進し、ワシントンのお偉方からの覚えが良くなる、ただそれだけのために。——

## 村人たち

新潟市の郊外に、焼山、京ヶ瀬と呼ばれる農民集落があった。村人は私と会うとき、決まってグループで固まって話をした。日本近代史の研究者たちは自分が聞き取ったインタビューテープを提供してくれ、あの夜の出来事を体験した人の手記も見せてくれた。

後に私を「信頼できる人物」と見定めた人は、集団の目や耳を避けて単独で会い、自分の体験と情報を語ってくれた。

ただし、あくまで匿名で、「ここだけの話にしてくれ」と念を押された。村人だけでなく、郷土史家たちさえそうだった。名前を公にしてリスクを冒すことを誰も望まなかった。そういう人々の話を組み合わせると、次のような展開になる。

あの夜、ジョーダン・クルーが降下した場所は、彼らの育ったアメリカの田舎とそっくりの共通性があった。世界中の田舎がそうであるように、新潟郊外でも、長い歴史に培われた役割分担のルールと暗黙の行動規範があった。

戦時中、彼らの態度や行動は、宗教や人種偏見やナショナリズムの混乱でネジ曲げられたが、彼らの生存を保障する政府にだけはつき従う結果を生んだ。

彼らは、世界中どこでも共通する、素朴な生活者だった。

B 29のジョーダン機が天から落ちてくるまでの村人の記憶と暮らして、季節の移ろいに調和した平和なものだった。

彼らは農地を耕して収穫に励んだ。それもまた戦争協力であった。彼らが作った食糧の大部分は政府の手に渡ったが、少しは自分たちのために残す術も知っていた。違法ではあったが、近くの阿賀野川で魚を釣り、時には村に迷い込んだウサギを捕まえた。食糧難の新潟市民に比べて、村の食生活はまだまだだった。

飢えの理由は、都市部への空襲に加えて、B 29が主要港湾に機雷を投下したからだだった。主要食糧、医薬品、武器の供給不足が生まれた。控えめに見ても、この時期の平均的日本人の摂取カロリーは劇的に下落した。国による食糧配給制度は壊滅的状况だった。焼山、京ヶ瀬地区の農民たちは食糧備蓄を始め、闇で売った。あるいは町に住む親族のために裏の流通ルートを確保した。

焼山の村人たちは飢えの不满を語ったが、大都市では事態は遙かに深刻だった。戦争という不幸を利用して利益を得る農民は怨嗟の対象になった。物語は、どこに立場を置くかによってすべてが違って見える。中国戦線からの帰還兵以外は、村に住む大部分が女性と子どもだった。若者たちは一〇代の者も含めてすでに徴兵され、国防の任にあたっていた。

戦争が激化し、日本内地に展開する部隊は「最後の一兵まで戦え」と号令されていた。どこへ行くのも命がけになった。住民の記憶によれば、京ヶ瀬付近の学校を卒業した兵隊五〇〇人以上が一九四四年の初めに南太平洋に送られた。四五年

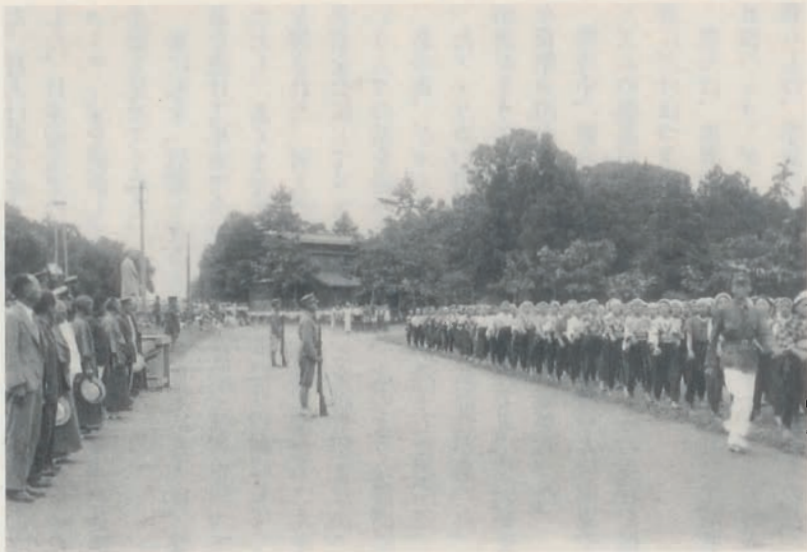


写真2 横越村「国防青少年団」の行進（1941年はじめ）

（写真提供 佐藤忠造）

までに、全員が戦死または行方不明になったと、匿名を希望する農民は筆者に語った。

空襲を受けた都市から逃れ、身を寄せてきた子どもや老人、

親類たちの面倒を見ていた村の女たちは、空襲のひどさを聞き、怒りでふるえた。それは、9・11事件を連想させる。あの現場を見た者は、世界貿易センターに飛行機が突っ込む場面を何度も凝視する。空襲を体験して生き延びた親戚たちも、何を現場で見たか、何度も繰り返し語った。その憤怒とトラウマは、やがて聞く者たちの意識の一部になる。さらに、時間とともに家族をめぐる葛藤が生まれてくる。

夫や息子たちは、日本の家族にとって、中心的な役割を担っていた。しかし、女たちは、日々の家事をこなしつつ、「夫や息子はもう帰ってこない」という悲しみを口にしてはならなかった。世間的には「名誉の戦死」なのだから。高楠順次郎はこう説明する。

「子どもを殺されると親は最初は取り乱すが、すぐに歯を食いしばって『天皇陛下のため』と言って耐える。軍隊から夫の戦死を告げる電報が届くと、妻たちは『立派に軍人としての務めを果たしてくれた』と喜ぶのは、このような精神のためである。西欧では妻は卒倒するだろう。しかし日本では、妻は自然な感情を抑え、家族に動揺を見せ<sup>注</sup>ない」

人間としての自然な感情の発露が許されない状況に彼女は取り残される。いつまでも嘆くことは「みつともない」ことだった。新潟の村の女たちは、表向きはストイックな天皇崇拜の姿勢を保ち、お召しがあれば息子や夫を犠牲に差し出した。彼女たちが抑えに抑えていた感情を表に出す機会は、深

夜の粗末な我が家にしかない。

戦前、村で小学校を卒業できた者は少なかった。そのうえ戦時中は授業時間も減らされ、戦争継続のための勤労奉仕に使われた。一九四五年までに、文部省は研究機関と小学校を除いて学校を閉鎖し、「本土決戦」に備え、すべての生徒を労働力として動員した。

横越では、生徒たちはリサイクル用のスクラップを回収してトラックに積み込んだり、農作業に明け暮れた。ちょっとした規律違反で殴られることは日常茶飯事だった。少年たちも女性たち同様、警防団による竹槍訓練を受けた。戦場を体験していない者は、来るべき召集に武者震いし、ある者は家族を殺された恨みを晴らそうと復讐の刃を研いだ。

重荷は増える一方で、虐げられつづける状況に、誰も文句を言わなかった。郷土の若者が外地で戦死したり、新潟付近で船が沈没した、といった噂は伝わってきた。しかし、焼山のような田舎では、戦争とは、せいぜい警防団の行進訓練ぐらいのものであり、日常から遠い、抽象的なものだった。そこに、一九四五年七月二〇日、戦争そのものが襲いかかってきた。

### 最後の飛行任務

新潟への飛行任務は簡単に思えた。第六爆撃隊の五機が七月一九日の夕方、早めに飛び立ち、硫黄島経由で日本に向か

った。仙台近くの海岸線から西に進路をとり、山を越える。そして佐渡島と新潟の間を迂回して機雷投下区域に到達する。一機ずつ各種の機雷を投下すると、阿賀野川に沿って日本アルプスを回り、往路と同じルートを通ってテニアンに帰還する。

午前一時少し前、新潟市内全域にサイレンが鳴り渡った。人々は我さきに電気を消し、金属の破片や火の粉を防ぐために、綿入れの防空着や頭巾を身につけた。当時書かれた未公開資料を読むと、市民を襲った恐怖がまさまじとわかる。

「新潟市内では人々は防空壕に急いだ。いかつい顔の医学生オミ・ケンサクは育ての母親に小さな人形ふたつを届けた。その際、暗闇でつまづいて転倒し、片腕を骨折した。新潟ホテルのメイド、フミコも、はだして下駄をつつかけて走った。思い出を興奮して語った。小型バス運転手、三十郎は新しい乗り物を道路脇に停車させ、一息入っていた。ドイツからの亡命者ヤコブ・フィッシャーは自宅を飛び出し、海岸の砂丘へ走った。眼下で海は唸りをあげ、遠くウラジオストクから押し寄せる波が泡となって砕け散っていた」

5 B、15 Bと呼ばれていた収容所で、連合軍捕虜たちがあばら屋を出て見たものは、「真っ黒いベルベットの闇を背景に、まるで刀剣が輝いて振り下ろされるように、サーチライトが走っていた」光景だった(ウィリアム・ハワード・チテンド

ンの回想による。

B 29 接近の音は、長く人々の記憶から消えない。聞いた人の表現によれば、底知れぬ低音と深い轟音が互いにこだまするものだったという。住民は夜の空をじっと見上げ、港の向こうから、今まで何度も聞いたゾツとするその音が、不可視のエンジンから発して押し寄せてくるのを聞いた。

ジョーダン は先行する一番機に乗っていた。約六〇〇メートルの低空飛行を維持して新潟港を飛んだ。爆撃手のライドは、「爆弾倉のドアを開ける」とアナウンスした。機雷はパラシュートで眼下の暗い海に投下されていった。

時々、対空砲火があちこちでボンボンと鳴ったが、貧弱なものだった。至近距離ではじめてハッとさせるものはなかった。新潟港を機雷攻撃した他のクルーも無傷で帰還するだろう。ジョーダン・クルーは漆黒の闇に深々と抱擁されて飛行した。クルーは仕事に集中した。最後の機雷が投下されると、ライドは爆弾庫の扉を閉じ、ジョーダンは帰還のために少しずつ機体を上昇させはじめた。

この時だった。ナビゲーターのトランプは運命的な決断をした。出発前のブリーフィングでは、機雷投下後は東に転じて新潟市街から離れる手筈になっていた。トランプは、それをやめ、「迂回せずまっすぐ基地に帰還しよう」とジョーダンに進言した。これは新潟の中心部を通過して南下すること意味する。実はそこに、かなり多数の高射砲が設置されて

いることを、クルーは誰も思い及ばなかった。東京から運ばれた高射砲には、レーダーで作動する高性能サーチライトも装備されていた。

ずっと後にトランプは手記を書いている。「あの頃、僕は二一歳の若造だった。自信過剰だった。しかし、あの時もし南下ルートを取れば、一時間、いや二時間は短縮して帰還できたはずだった」。

当初のフライト計画から逸脱してルートを短縮できるのは、クルーに突発事故が生じた場合だけである。だが、二時間の飛行短縮は、戦闘に疲れ切ったクルーにとっては抗しがたい誘惑だった。ジョーダン・クルーは、直前に敢行した全行程二二時間の朝鮮への出撃で疲れきっていた。

誰も、*エコノミークラス* の窮屈な座席で、さらに七時間のフライトを楽しまされるのはゴメンだった。しかし、この夜だけは近道で帰還してはいけなかった。クルーがやれやれと一息ついた瞬間、突然、思いがけないサーチライトの光が下から襲いかかった。

新潟の住民は、上空を探索するサーチライトの動きを眺めていた。その光の一本の線条が闇夜をひと刷けた瞬間、突如、一機の B 29 の姿が捕らえられた。ジョーダンの機体だった。多くの人がハッと息を呑んだ。まずサーチライトの動きの速さに驚き、戦慄、憎悪、恐怖の念が次々にこみあげてきた。ジュラルミン製の巨獣が頭上に地響きを立てて押し寄せ

てくる！ それを見る恐ろしきと敗北感。彼らの頭をかすめた思いは「こんなものを相手に勝てるのか？」だった。

サーチライトの数が増した。ジョーダン・クルーの手が凍り付いた。対空砲火がいつせいに炸裂しはじめた。ゆっくりと、赤色のスポットライトが空に上昇して、機体中央を捉えた。地上の人たちは息をこらし、何が次に起こるかを待った。ほんの数秒で、B29は撃ち落とすには遠すぎる高度へと飛び去っていくはずだった。

機上の乗員たちは生きた心地がしなかった。今のような低空飛行では、巨大で「うすのろな」B29の機内にいることは実に危険なことだった。彼らができることは、対空砲火のガンレット（左右からの一斉射撃）の間を走り抜けることだけだ。任務を終えて一緒に飛行していた他のB29のクルーたちは、僚機に何が起こるか、見ているしかなかった。

機体に激しい衝撃が走った。クルーは最悪の恐怖を確かめるように外を見た。左翼の内側エンジンから煙があがっていた。高射砲弾が命中した！

地上では、新潟市と周辺村落の住民たちが、対空砲撃が敵機に命中し、裂け目から閃光が走っているのを見た。一瞬の戸惑いのあと、彼らは叫んだ。

「あれを見ろ！ 当たったぞ、燃えている！ ああ、落ちてくるぞ！」

その場にいたすべての人が歓喜の声を押さえきれなかった。

まるで夏の火花に歓声をあげるように。

「新潟日報」の記者だった清水俊吉はその時のことを鮮明に記憶している。

「先頭を飛ぶ機体が闇夜に炎上した時、嬉しくて思わず手を叩きましたよ。周りの者たちは『万歳、万歳！』と叫んでいました。ある女性は、機体が墜落したのを見て、抱いていた子どもを脇の地面に降ろし、手を叩いたそうです。人間の感情なんて、そんなもんですよ」

戦争は、常に運命と悲劇が意外な展開を見せる。七月二〇日早朝の場合も例外ではない。ジョーダンの機体が空中で炎上したその時、予測しない価値転換が起こった。B29という、新潟の住民にとっては難攻不落の「死のアイコン」が、今や魅力的な「希望の象徴」に転換したのである。他方、ジョーダン・クルーにとっては、アメリカの優越の牙城であったものが、もろくも炎上して、死の罠に落下してゆくのだった。トラウマとなる記憶が、ここから始まろうとしている。

(つづく)

注1 高橋順次郎「日本家族制度の社会的・倫理的価値」International Journal of Ethics 誌第17号、一九〇六年一〇月、一〇三ページ。なお、引用文は英訳文からの反訳。

注2 ヴァレリー・ブラティ「占領ミッシェンの断片」一九七二年。タイプ打ちの未刊行の原稿。ブラティは占領初期に新潟に赴任。七月二〇日の出来事を独自調査した。後にGHQ労働局長官になり総評の創設を主導した。